

「令和元年度群馬県立自然史博物館活動の評価」について

群馬県立自然史博物館専門委員 小田川浩道

新型コロナウイルスの国内初感染が1月15日に確認され、3月2日からは全国の小中高が一斉休校に入った。未知のウイルス感染が広がる恐怖とクラスターの発生。やがて緊急事態宣言が発令され、まちなかや観光地から人の姿が消えた。

影響は博物館や美術館など公共施設にも及び、長期の臨時休館を余儀なくされた。企画展は延期または中止。博物館や美術館はネット空間でのバーチャル鑑賞を試行するなど手探り。再開にあたっては、入館者に検温、マスク着用を求め、入館制限を行って3密を回避するなど対応に追われた。

群馬県立自然史博物館は開館から24年がたち、経年劣化に伴う展示品のリニューアルと最新機器への入れ替えは大きな課題だ。県財政の硬直化で十分な予算確保が見込めないなか、職員が映像の撮影や編集、展示品の模型制作までを担ってきた。今回刷新された火山のコーナーでは溶岩粘度の違いが分かるよう、展示教材をペットボトルを使って手作り。鉱物コーナーでは単に鉱石を展示するだけでなく、美しく輝く姿をモニターに映し出すことで新たな魅力を提示した。顕微鏡で覗かせる以上に効果的だと思う。

常設展では鳥類の剥製が傷んできたり、魚類標本は体表の色合いが実際とはかなり異なるものもある。近年は美しく着色した透明骨格標本なども人気があり、標本の見せ方も多様化している。身近な動植物こそ魅力的な見せ方を検討してほしい。

利活用を求めたいのは職員の知見だ。職員が独自に行っている調査研究は16分野40研究、外部との連携は46研究。発表論文18本、学会発表26本、一般向け雑誌への発表は14本に上る。だが成果は県民に伝わっていない。

県民に向けて発表されたのは碓氷川で見つかった化石が新種のマイルカと判明したという1件のみ。もちろん研究テーマが一般向けではなかったり、報道発表には及ばない基礎的な研究もあるだろう。だが知見を県民に伝え、還元する方法はさまざま。企画展だけでなく、発掘や標本作りといったワークショップ、総合調査の舞台となっているみなかみ町での観察会など機会を設け、知見を披露してほしい。

職員が博物館の在り方について必ずしも全ての面で満足していないことは、意識調査で明らかになった。改善すべき課題が明確になったことで、今後よりよい博物館の在り方を目指して内部から改革が進むことを期待したい。